

Integrated English Course による

英語教授法の研究

——その実践をとおして——

宇 都 裕

I 序——日本の英語教育の問題点——

Integrated English Course（統合英語コース）については、1994年の文京女子大学紀要で初めて紹介して以来、その理論に基づいて、授業内容、方法に改善を加えてきた。本稿では途中経過ではあるが、これまで挙げてきたと思う成果の一端を公開し、諸兄のご批判をいただきたい。

その前に、英語を学ぶことの意味を少し考察してみたい。

英語を学ぶことの第一義は、その言語を媒体にしてコミュニケーションすることにあり、英語はそれ自体が目的ではなく、あくまでも手段のために学ぶという認識をもつことが必要である。後述するが、新指導要領の中学編、高校編でも『情報や相手の意向などを理解したりする実践的なコミュニケーション能力（の基礎……中学）を養う⁽¹⁾』ことを明記している。

先生方の中には、今でも英語学習を知的訓練や、教養のためと考えている方もおられると聞く。また、ひと昔前になるが、学校英語は「教養」か「実用」かということで大論争が起こったが、結局は明確な結論も出ないままにその論争は消えてしまった。どちらの主張にも一理はあり、言わんとするところはわかるが、是か非かと、勝敗の決着をつけねばならないところまでエスカレートしたことは、いささか大人げなかった。現実的な視点に立てば、自ら答えは出てくるのではないか。すなわち、「ことば」の学習の本質とその目的からみて、習得しつつある言語（母国語を含むほかのどんな言語でも）が、対話や通信文として相手と実際に意思疎通をはかる道具として役立たなければ意味はない。英語に対して、いかに深い造詣をもち、それをとおして高い教養を身につけるに至ったとしても、その知識を己だけではなく、他の人に伝え分かち合う手だて——伝達技術を習得していなければ、それこそ一方的であろう。例えば、語彙において、辞書の一冊を丸暗記していても、それらを統語して全体的にまとまった意味をもたせる方法——文法を知らなければ単語の知識は十分に生かせない。加えて、文法も「知識」の域にとどまっている間は生きてこない。シチュエーションに合わせて、的確な意思表示ができ、相手とのスムーズなインターアクションに供し得てこそ、その使命が果たせる。すな

わち、「ことば」はコミュニケーションのための道具、という第一義の使命をもつ。

ここでもう少し「ことば」の内面に目を向けてみよう。

「ことば」は、更に思考の手段としての機能を果たしていることもわかる。ことばは、その言語を話す集団に共通する事象や思考、概念を、公約数的に記号化した体系であり、一定の原理で統一的に組織された知識の全体とも言えるかもしれない。江淵氏は言語を、「文化全体を代表する『シンボル・システム』としての意義をもっている。——それ自体文化の一要素であるとともに……全文化体系を説明するモデルとなるという面がある⁽²⁾」すなわち、言語はその言語を話す人々の、文化的・歴史的背景を記述する代表形式であるから、他の言語を学ぶことは、異文化理解の促進にも大いに役立つことになる。したがって、上記論争における言語の二面性を、二者択一ととるべきではなく、互いに相補しあい、あるいは相乗的に作用しあってその機能を果たすといえよう。「ことば」の背景にあるその国の文化、習慣、ものの見方考え方を知ることによっていっそうその言語についての理解が深まり、さらに「ことば」を学ぶ興味も増すはずである。

データとしては古くなったがまだその主旨は生きているので、UNESCOが1965年（昭和40年）に出した勧告を紹介してみる。これは中学（初級）での外国語教育に関する加盟各国文部大臣あての第59号である。

“The teaching of modern foreign languages is not an end in itself, but should serve by its cultural and human aspects to train both pupils' mind and character and contribute to better international understanding and the establishment of peaceful and friendly cooperation among peoples.”⁽³⁾

その言わんとするところは、外国語教育は、①その言語習得のみが唯一の目的ではなく、②言語の文化的、人間的側面から生徒たちの知性と人格鍛練に役立ち、③異文化相互理解と諸国民の平和友好関係の確立に資すべきである、となっている。

ある国の実情を知りたい、ただ表面的な事象ではなくて、ニュアンスまでも含めた細密な情報を得たい、というときは、やはりその国の言語を使い、ことばの裏にひそむ「言外の意」までも感じ取る語学力を身につけておくことが最も望ましい。

それには、その国の言葉（相手言語）を聞き、話し、読み、書くの四領域にわたって十分に習熟していなければならない。さらに、上記四技能は、実際のコミュニケーションの場では、単独に機能することはきわめてまれで、それらの二つまたは三つあるいは四つの技能が有機的に関連してはたらく場合が多い。

たとえば聞くこと——話すこと、読むこと——書くことのほかに、聞いて理解し、書いて知らせる、または読んで理解し、口頭で意見や考えを述べるというように習熟度が高くなるにつれ、特定の場面や状況に自在に対応できる組み合わせが生まれる。したがって、特に初期の段階を除いて四技能の習得はそれぞれ独立して行なうべきではなく、複合的な組み合わせによってなされることが望ましい。これらについての具体的な考察は後にゆずりたい。

いずれにしても、四領域の関連における習熟徹底度がいまひとつ不十分であったことは否めない。

1. 制度上の問題

文部省は、英語に関するさまざまな問題の改善に向けて、中・高校における新指導要領を発表した。実施は、それぞれ中学校が2002年4月、高校が2003年4月からとなっている。

今度の改定でドラスティックに変わったのは、中・高とも外国語を必修にして、中学校では英語を履修することが義務づけられる。高等学校では、中学での学習をふまえながら、四つの領域の言語活動（言語習得上の四技能）の有機的な関連を図った指導に主眼を置き、英語の実際の運用能力養成を目指していることは、遅きに失したとはいえ、歓迎したい。とにかく、中・高一貫して、基礎的・実践的なコミュニケーション能力を養う点にはっきり目標が定まったことで、これからの成果が期待される。

さらに、上記実践的なコミュニケーション能力の育成を図るため、シチュエーション（言語の使用場面）と、ファンクション（その働き）の項目を設け、また言語材料の精選もはかられた。これで制度上の一面の整備がやっと整った。しかしもうひとつ課題がある。

それは高校・大学の入試制度というよりも、出題傾向である。近年少子化で「全員入学時代」と言われているが有名校への希望者には相変らずの難関となっている。高校側でも、名門校合格の実績を作るために、受験対策に必死となる。そこで「実践的コミュニケーション能力を育てる」言語活動中心の授業方針も、中途から受験対策の勉強に切り替えられてしまう。その間の悩みを、ある高校の先生がこのように語ってくれた。

今回、文部省の指導要領改定により、中学・高校一貫の「実践的コミュニケーション能力養成」の方針が明示されて、やっと本来のあるべき英語教育の姿に戻ったことは本当に喜ばしい。それで、もしこの方法で3年間学べるとすれば、かなり実践力をもつ生徒が育ってくると思う。しかし、そこに大学入試が立ちはだかってくる。2年生までは実践指向の授業が、3年になると入試主体のあるいは入試をにらんだ詰め込み主義の授業に切り替わる。実際入試のことは気にかかりながらも、現実の方針転換に戸惑うのは生徒である。もちろん、それまで培ってきた実践的英語運用力が入試に役立つこともあろうが、それでは足りない。聴解や速読を基軸にした直答・直解が求められる実践型には、文法や和訳は、アバウトになり、厳密さを欠く。入試にはそこが盲点となる。

最近の大学入試もずい分改善され、和訳を出題する大学は少なくなった。（特に私立では85%の大学で英文和訳問題を廃止しているのに対して、国公立では約46%が何らかの和訳問題を出している——2000年度……⁽⁴⁾筆者注）それでも、たとえ数パーセントの大学が和訳を出題していたなら、高校の先生方は絶対無視できない。

それからが地獄です。必須事項を教え、次々と模試を課し——まさにそこでは生徒教師ともども血みどろになって、2年分の遅れを取りもどす戦場となるのです。そして、いつでも被

害者となるのは生徒ですが、教師は結果を見るたびに自責の念にさいなまれる。毎年このくり返しが実態なのです。

この先生のように、真剣に英語教育にとり組んでいる他の多くの先生方も、同様に理想と現実には挟まれて悩んでおられるであろう。一方では、入試第一主義にさしたる抵抗を感じることなく、かえってそれを誇りにして、正面から入試対策と取り組んでいる先生もいると聞く。

日本の不毛の英語教育といわれる現実も、つきつめれば大学入試のあり方とその運用、加えて文法訳読法を基盤としたテスト問題の混入にあると言わざるを得ない。

平成11年度に改訂された、高等学校新指導要領をつぶさに読んでみても、そのどこにも「和訳する」とか、「英語を日本語に置きかえて聞きとる（理解する）」などと指示されたところは全くない。

それでは、以下その要点を幾つかに絞って見てみよう。科目数は6つになっており、オーラル・コミュニケーションⅠ・Ⅱ、英語Ⅰ・Ⅱ、リーディング、ライティングである。

外国語に関する科目の改訂の要点

⑤「リーディング」

読むことが文字によるコミュニケーションであることを踏まえ、英語を読んで、情報や書き手の意向などを理解する能力を育成することとした。特に、場面や目的に応じて効果的に読み取ることができるようにするとともに、この読み取りの能力を活用して積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図ることとした。

⑥「ライティング」

書くことが文字によるコミュニケーションであることを踏まえ、情報や考えなどを英語で適切に書く能力を育成することとした。特に、書く目的を考えながら効果的に書けるようにするため、書く過程を重視した指導を行うとともに、書く能力を活用して積極的にコミュニケーション⁽⁵⁾を図ろうとする態度の育成を図ることとした。（下線は筆者による）

上記の解説では、従来の「読むこと」、「書くこと」を「リーディング」「ライティング」と仮名書きにし、いずれも「文字によるコミュニケーションである」としている。ここでの「文字」は「英語」を意味し、後の「英語を読んで情報や書き手の意向を理解する能力」と、「情報や考えなどを英語で適切に書く能力」と結びつけていることがわかる。さらに後ろの、「読み取りの能力（読む能力）を活用して積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成」で、その意図をはっきりする。そこには母国語抜きで、目的言語（英語）による積極的なコミュニケーションが図られるよう求めている。たとえ便宜的であろうと「英文和訳」や「和文英訳」の入りこむ余地はない。これは、あくまでも母国語なしの「英文直読解」と「自由英

作文」的な表現法の習得と解すべきである。したがって、この指針に沿って組み立てられる高校の授業は、当然「直聴―直解―直答」であり、また「直読―直解―直書」法で行われることになる。そして、実は、これこそが自然な言語習得の過程なのである。

先生方の中には、母国語を媒体としない外国語習得は非効率的である、あるいは不可能である、理解度が深められないし、理解度の判定もむずかしい、として異議を唱える人がいるかもしれない。しかし、外国語導入に当たって、教材を精選し、それらの適切な配列による授業の組み立てで、自然で、理想に近い言語学習の体系は打ち立てられる。初めの段階では、年令差にもよるが Alphabet, Phonics, 音素に効率よく習熟させ、やさしい読み物からスタートして、多読主義ですすめていく。また、辞書は、英和辞書使用をできるだけ早く英―英辞書に切りかえ、英文和訳のくせはつけない。本学には、1979年に「文京語学教育研究所」が設立され、以来23年にわたる児童英語教室が開かれてきた。最年少は5歳から、小学6年生まで毎年110名程度が学んでいる。教師は、TPR (Total physical response) と英語で授業を行なう。初めは戸惑う者も多いが、数回反復すれば何を求めているかを理解し、次第に英語の雰囲気になれ、やがて積極的に参加しはじめる。程度は低くても、彼らを通じる、生きた英語を学んでいるよろこびが実感として伝わってくる。このような子供たちと長年接してきて、教師の忍耐と熱意があれば、(そしてもちろん、ふさわしい実践英語力を習得していることは前提であるが) 自然言語習得過程による学習は、十分に可能であると思う。ただし、この方法が方向転換を迫られることになしに、中学、高校まで一貫して続くなら、真に実践的コミュニケーション能力をもった生徒が育ってくるはずである。

しかし残念ながらその一貫性は保たれない。大学、あるいは高校入試で出題される英文和訳、記憶力や説明を求めるような文法問題、文意に関係ない末節的な設問等――いずれも受験生の実践的なコミュニケーション能力を計るものではない――が一貫性を分断阻害している。先ほども触れたように和訳は、国・公立が約45%、私立では15%、合計25%と、全体の4分の1の数に減少しているとはいえ、受験生に与える負担と学校教育に及ぼす悪影響は計り知れない。統計的にみて、全国で4分の3の大学が、すでに「和訳」問題を止めている。ただこれは数がゼロに近づけば解決される問題ではなく、完全に無くなってはじめて実効が上がる。入試が授業体系に及ぼす悪弊を是非とも払拭したいものである。

2. 教授上の問題

「教えられたとおりに教えるな」と、前早稲田大学教授、(故) 牧野力氏は、口ぐせのようにおっしゃっていた。先生はまた、文京語学教育研究所の顧問でもあったので、付属の中・高の先生方を混じえて、毎週研究会を開いていた。優に七十歳を過ぎておられたが、特に英語の子供から大人までの一貫教育研究に熱心で、実践的で理路整然と説かれる情熱にはいつも頭が下がる思いであった。導入には Phonics を用い、旧来の文法訳読法を改め、直読直解方式を採用すべきである、とその頃全員でその具体化に議論がわいたものであった。実は、その頃受け

た刺激に触発されて、筆者が提唱する Integrated English Course (IEC)― 統合英語コース (1994年) に至り、それに、英和辞書を切り替えて、英一英辞書の使用にまで実際の教室授業で実践するようになった。その理論的背景と、実践報告は後の稿にゆずる。

筆者は、文京女子大学研究論集で、大学教育の改善点に次の三つをあげた。イ) 教師の意識改革と実践、ロ) 教育現場における教科内あるいは教科間の意思疎通と研究協力態勢の確立、ハ) 英語教育が本来目指すべき、中・高からの一貫性に基づいた学生の実践的コミュニケーション能力を育成する授業の確立⁽⁶⁾。そのために適正な教科目の選定、連携、教授法など、カリキュラム全体を社会のニーズに応えうるものとして、十分整合性を備えているかを再検討する必要があるであろう。

少子化による現実の厳しい生存競争が始まって、多くの大学が個性派を目指した改革に真剣にとり組んでいる。この大事な時に、英語の教師も、謙虚に自己吟味し、払っている熱意や努力、内容改善が、学生の真の英語力―実践的コミュニケーション能力の育成に資するものとなっているかを洗い直し、必要とあらば積極的に取り組むことが求められる。小・中・高校では適宜、文部省が「指導要領」により、時代のニーズをふまえた指針を出し、少なくとも一貫した流れの中に教育がなされているが、大学では自らが工夫していかなければならない。そこに工夫の妙味と苦労があることは言うまでもない。

II Integrated English Course : 統合英語―理論から実践へ―

1. IEC の理論的背景

IEC は、語学学習における四つの領域、すなわち聴く、話す、読む、書くの四分野にわたり、教授目的にしたがっていずれか単独のあるいは複数の分野に視点を据えながら、他の分野も含めつつ、トータルな言語活動をすすめていく方式である。授業は English through English が原則、日本語の使用は最小限に止めることが望ましい。これまでの授業は、各科目が縦割りの、独立分離形でそれぞれ講読、文法、作文、LL、英会話と他との関連関係なしにすすめられていた。各教師は授業の組み立てにあたって、独自の領域内に限るようにし、むしろ、他領域を侵さないことに気をつかう人も多かった。すなわち、他教科との意思疎通や情報交換などを図る手だてはなされないまま勝手に行なわれていたといえる。

このように、教育現場で「施行者」がいればその対象となる「受益者」も当然いる。そして受益者 (生徒) は、最大限の益を受ける権利がある。しかし、学校英語教育の中ではそれが今までは適正に作動してこなかった。その最たる原因の一つに、上の四領域区分に忠実に従った縦割りの教科目設定と教授法が挙げられる。

この点について、受益者であるべき生徒は「英語」という単一の言語を、実践的コミュニケーション能力を有する域まで習得したいと願いながら、それを縦割りの科目別にバラバラに教えられてそれで終わりとなる。すなわち、教科間に内在するはずの共通項を集約し、コミュニ

ケーション言語に収斂させる最も重要かつ必要な段階は、まったく手つかずのままに生徒にまかされてしまっている。教科内の分析が細部に亘っているとすれば、その分だけ結果を寄せ集めルールを導き出す「帰納過程」は複雑になる。また多大のエネルギーも要する。英語のこの有機的な結合の部分、言いかえれば扇の要の部分进行を教える点が欠落している。

この点をもう少し具体的に考えてみよう。これまで生徒たちは、文法、リーダー、作文、発音などを教科として習いながら、どれもバラバラでそれらが「英語」という単一の言語を習得する過程で、互いにどのような位置関係にあって、相互作用しながら融合一体化して、やがて伝達手段としての機能を果たすようになるのか、という仕組みなど知るはずがない。またそこには言語のもつ音と文字の二面性も考慮に入れなければならない。しかし、いずれにしてもこれらの点を安易に見過ごしてきた教師の側の怠慢は許されるべきではない。

さて、話を本論に戻し、IEC の概要説明を続けることにする。IEC は、その時間の教科の目標により、言語の四領域のいずれかに比重を置くが、同時に他の領域とも関連を図りながら、同一教材による同一時間内での授業の組み立てをいう。したがってそこには科目の要点分析と選択、他領域との融合配列など、事前の周到な準備が必要となってくる。また、年令や習熟度に応じた教材の取捨選択や対応の仕方の工夫も要求される。運用にあたっては学習者の興味や意欲を考慮に入れ、指導に柔軟性をもたせなければ、効率は半減する。加えて大切なのは辞書の使用である。授業では実践主義を目指すのであるから、文法訳読法を完全に廃し、目的言語から直ちに情報を得ることになる。そのためには英和辞書の使用を止め、English-English Dictionary に切り替え、必要ならば平易な Thesaurus (同義語辞典) の併用を極力おすすめする。しかし、もし生徒に不安があれば英和辞書の使用も許すが、英英で判らなかった単語を確認のためにひかせるにとどめる。

これまで IEC のアウトラインについて触れてきたが、内容面から今少し考えてみよう。統合できる教科には四領域のいずれかに属する読解、作文、発音、文法などが挙げられるが、ねらいがどの領域にあるかによってウエイトの置き方は当然ちがってくる。

私の場合、幾つかの理想の型を定めている。ほとんどの場合、リーディングを導入に用い生徒の習熟度にあわせてやさしい読み物(童話や物語等)をまず、1) 教師のモデルに従った音声による斉読、個別読みを十分に行ない、読みの全体の部分に音声で馴れる。2) 本文中の幾つかの語彙、句などは文法用語を用いずに、英英辞書と一緒にその意味を捜し、同義語、類義語などを使って帰納的な習熟をはかる。3) 習熟した語・句・構文等を用いた管理英作文あるいは自由英作文にチャレンジさせる。4) 各学生には、自分で作った作文を音読させ、必要なら最小限の訂正を行なう。5) その後必要であれば、グループ別に、テーマに沿ったダイアログの組み立てを課す。すなわち、授業内の全体的流れは文字文を材料に使い、その音読をくり返し、さらに創作文字文からダイアログに組み立てたものを、そのグループのメンバーが発表する。

これは、文字と音声の一体化をはかり、読解を作文・会話までもっていくことで、3教科の

基本的な統合が可能になる。そして学生は、一連の作業過程をとおして、内在する有機的な結合の意味を悟り、自分が実践的なコミュニケーション能力習得への道を着実に辿っていることを実感することになろう。このことが、とりも直さず彼らの英語に対する興味を高め、動機づけと意欲の持続を促す原動力ともなるのではないだろうか。

言語学習の究極の目標は、高次元の音声収集伝達技術修得と、文字言語理解とその伝達にあるとすれば、IECによる教育技術と内容を高めることが、効果の上がる一つの有効な方法であると確信し、提唱するところである。

2. 実践的試み——方法・到達度

IECの理論については、1994年の文京女子大学研究論集 Vol.4 に初めて掲げ、理論に沿いながら、実験を試みてきた。当初は、本務校での担当がLLだったので、音声主体を他の三領域に広げるのは、初期実験には適さないと判断し、兼務校（W大、都内）のリーディングのクラスを対象に行なった。開始年度は1997年で、すでに5年経過した。授業のねらい、内容、すすめ方についてはシラバスに明記し、年度初めに配布、口頭での説明も加えた。授業が始まって約2か月の間は、学生の戸迷いと動揺は隠せなかった。なにしろ、講読といいながら、全く和訳なしで、通常授業の約3倍の量のテキスト、プリント等を順繰りに音読し、時折ディスカッションを交えるだけだから。学生は文をセンス・グループで判読しながら、自然読みすることに苦闘していたが、いつしか帰国子女の朗読に触発啓蒙され、学年の終わり頃には在来の日本人学生と帰国子女の判別はつかないまでに均等化していた。すなわち、クラスの全員（約20名）が、直読直解方式でスムーズにテキストを読めるようになってきたのである。このようにして、文字文を音声に変え、目的言語のみをとおして理解しつつ気楽に読めることで、本来の「小説読み」の楽しさを彼らは知った。それまでの、リーディングといえば即和訳という思考パターンは消え、彼らは文字と音声と意味を同時に、自らの脳の中でIntegrateさせる能力を持つに至った。それにつれて、英語に対する興味と意欲がいつそう湧いてくるのが感じられた。残りはもう一つの領域、書くことである。これについては、当初から多読によって、もう一つは英英辞書を多用する（結果的に正当な英句、英文を読むことになる）ことによって、学期末の自由英作文のテストに表われるはずである、と信じていた。予想は当たった。テストは、教科書、プリント類、辞書（この時だけは、英英辞書だけには限らぬこととした）持ち込みの、B-4二枚にわたる作文を、直書式、クラス内だけの90分で書き上げることであった。事前に主題選びと記述内容を考えてくることは認め、当日は自筆による記録メモ類は一切禁止した。要は時間内で、自分のことばにより、どれほどの内容が伝えられるかを計ることであった。少々の文法的ミス、選語の不適切という点には採点の基準は置かず、のびのびと表現するようにすすめた。最後に、学生の授業に対する感想、意見、要望などを書く欄を設け、毎学期の学生の反応に注目した。そこからは必要な改善点とともに、また大きな励ましと自信をも得た。⁽⁷⁾

学年末には年間プロジェクトとして与えてあった300頁以上の原書通読によるレポート（英

文で1500字程度、B5-5枚)を、活字で綴じて提出させた。配点100の内20%を配した。(本稿未添付の、Appendix I 参照)

ちなみに感想欄では「英文は、日本語に訳さねばならないとばかり思っていたが、そのままに読んで素直に理解できることがわかった」、「辞書に頼ることなしに、パラグラフをくり返し読むことによって全体を推察することができるようになった」、「英英辞書のおもしろさと、使う意味がわかった」、「生まれて初めて原書を通読し、英語を本当に自分でやったと実感した」、「原書を直読直解方式で読んで、小説のおもしろさがやっと分かってきた」……などといったものが多かった。

さらに年度が進むにつれて、同方式による実験クラスを本務校の Reading, Writing, LL へと順次広げていった。一応実験済みだからスムーズなスタートを切れるものと思っていたが、正直言って期待は裏切られた。こちらが望んでいたほどの反応がないのである。それは、彼女たちが直読直解に不慣れな点はもちろんのこと、基本的な読解力にも難のあることがわかった。それで、当初の方針を大幅に変え、原書の児童百科事典を集中的に読むことにした。

対象には、次の二種の百科事典を選別し、加えて、読める者に対しては Time, Newsweek のコピーも他クラス同様に配布した。

① Young Children's Encyclopedia (Vol. 1～Vol. 16)

② Children's Britannica (Vol. 1～Vol. 20)

(希望者) Time, Newsweek

各学生は、自分の英語のレベルに応じ、上の①、②のいずれかを選び、①の場合は毎時3トピックスを各自コピーして読む。②を選んだ者は1トピックをコピーし、どちらも大学判のノートに切り抜き貼付、読後の感想・意見を英語で数行書くことを課した。そして、毎時授業中あるいは終了後提出し、検印をもらうよう励ましたが、初めのうち毎回達成できた者は15名中約半数に過ぎなかった。それでも、時間とともに次第に全員がその方式に慣れ、自分の意見を数行の英文で表現することにも抵抗を感じなくなり、初期の目的は達せられた。

そして、2001年からは IEC 方式を LL の授業に組み入れた。もち論、授業の主眼は音声に関すること(とり分け「聞き取る力」を育てる)であるから、前期では「音素」の習熟に重点を置きつつ、負担にならない程度にリーディングのプリントからの音読を加えた。

学生には言語学習の四技能(領域)について、初めの段階で十分に説明し、どの領域から入るにしても、ことばを学ぶ目的は他の人とのコミュニケーションが図れることであることを理解してもらった。即ち、聞き、読む領域の“perception”(知覚作用)を、話し、書く部分“production”(生成作用)にまで高めて、己の意思表現ができるようになってはじめてコミュニケーションが成り立つ点に注目させ、前・後期のテストでは音声関連の問題に合わせて、短い自由作文も課した。LLの授業に、作文のテストの取り合わせに、幾分解せない者もいたようであるが、多読教材をこなすうちに、四領域にわたる学習は至極当然なものと認識されるようになった。

Appendix IIには、文京学院大学1年生前期 LL I のシラバスとテストサンプルを掲載し、⁽⁸⁾ 諸兄弟姉のご批評を乞う次第である。

なお、掲載に当たっては、学生の手書きのままで提示すべきであるが、印刷上の問題もあり、原文そのままを活字に置き替えた。(ここで、Appendix I, IIを参照ください)

一読してもお気づきのように、語法、論議の展開のし方、表現形式等で、満足ゆくには程遠いものであろうが、はじめての自由作文への挑戦の段階では、言いたいことをのびのびと、自由に表現することがまず第一と考え、形や文法にとらわれずに書くよう勇気づけた。結果は、平均60%程度の出来で、他のクイズ、プロジェクト提出物、発表、出席等を加点し36名全員及第となった。学生の方の感想では、当初英作長文などとてもないと思っていたが、英文多読のおかげで、何となく真似ながら要求の字数を満たすことができた、と正直本人も信じられないと語っていた。これまで、間違いを恐れ、書くことに極端な苦手意識をもっていたのが、この段階で薄れ、前向きに転じてきたとみることができよう。次はこの方法を継続することである。過去数年の経験から、回を重ねるごとに学生の作文力は向上し、それと同時に語彙選択、文法のミスも減少したことは事実である。即ち、IEC を、教科目に応じてうまく使い分けることでその実効は十分に上げ得ると信じる。(本稿末添付の、Appendix II参照)

III 適用モデルと今後の課題

IEC の本質と理論についてはこれまで数回にわたって論じ、総合的な実験も試みてきた。IEC を授業に導入する場合、リーディング素材を効率的に活用することが鍵となる。そのモデルとしての一例を次に示してみよう。

IEC College Model.

- [I] リーディング〈個人、クラス〉(黙読——静音読——個別声読)
童話、読物シリーズ、児童・子供百科事典、小説、新聞、雑誌などを、難易度別にあらかじめ選別しておき、学習者の年令、習熟度あるいは意欲に応じて適切なマテリアルを用いる。(後、口頭による Q & A, あるいはディスカッション)
- ↓
- [II] ライティング〈各個人—英語を用いる〉
上で読んだ内容についての感想、意見を書く。
- ↓
- [III] リーディング〈各個人〉
上で書いた感想・意見を本人が声読する。
- ↓
- [IV] リスニング〈クラス〉
感想・意見が読まれる間、クラスが聴衆となる。または、[I] のリーディングで個人またはクラスが声読すれば、同時にクラスの各個人は聴衆ともなる。

このような流れで四領域にわたる学習が可能となるが、モデルに書いたようには現実はいかない。子供から大人までのエイジレベルのちがい、モチベーション、習熟度、ニーズ、性別、それに教科目の要請等で、取り組みの方法や手順に変化が生まれることであろう。しかし、いずれのケースでも「リーディング」を基本導入として適用するのが最も自然、かつ効率的であると思う。

また、四領域をすべて単一時間内で取り扱うことにこだわらず、必要に応じた選択により、授業の流れをスムーズにもっていった方がよい。例えば、「書く」ことは次の時間にまわし、そこで多様な例文等を用いて練習するなどして。

さて、ここでもう一度「読む」ことに注目し、その働きと基本概念を考えてみよう。英語の場合、文頭は頁の左から始まり直線的に右方に向かって流れ、文尾で終わる。したがってある文を「直読直解方式」で読むとき、「理解」は文頭から文尾に向かって「直線的に進行する」ということである。聞き始め、読み始めた時点から、時間の経過に従って、理解が進んでいかななくてはならない⁽⁷⁾。

すなわち、英語を読む（聴く）ときは、いかなる時点でも〈逆戻り〉してはならないのである。音読であれ、黙読であれ、左文頭から読み始め、そのまま右に進み、文尾まできたらそこで終わり、理解も終わる。

しかし、英語におけるこの自然な流れを、大きく阻害するのが、和訳における「文法訳語法」がもたらす悪弊である。この、逆戻りのクセをまずもって日本の学校英語教育の現場から一掃しなければならない。加えて、単語重視主義〈これも訳読法のもたらした弊害のひとつ〉も、スムーズな読みの流れを止める要因である。

英文の読みにおける単語と文のとらえ方について、「心理言語学と英語教育」の中で著者の羽鳥博愛氏は、単語はコンテキストの中でこそその正しい意味が引き出されるとして、諸種の例文を用いて次のように明快な答えを与えておられる。

『紙の上に書かれた英文を見るかぎりでは、たしかに英文は単語から成り立っている。そして、文がいくつか連なってパラグラフができ上がっている。そのためか私たちの従来の英語に対する考え方は、単語がわからなければ文はわからない。文が一つ一つ理解できなくてはパラグラフの内容はわかるはずがないというものであった。しかし、最近心理言語学の研究が進むにつれて、私たちの従来の考え方、つまり、英文の理解は「単語→文→パラグラフ」と進むのだという考え方は考え直したほうがよいような状況になって来ている。……本当は「パラグラフ（場面もこの中に入れて考えてよい）→文→単語」⁽⁸⁾と進むほうがよいのである』。

羽鳥氏の示唆に基づいて、昨年学生たちが読んだ“The Young Children’s Encyclopedia”の中から一例として **MICE** “A Mouse in the House” の物語の一部を引用し、いかに楽しく読みやすい読み物であるかを紹介し、さらにそのストーリーの中の2語、‘scamper’ と ‘gnaw’ を文の流れの中で、どのように類推できるかを考えてみよう。

Do you like to eat cereal? Or nuts? Or apples? Or tasty sand-wiches made with bacon or cheese or peanut butter?

House mice do, too! In fact, they enjoy nearly all the foods that people like to eat. And since they also need a warm place in which to live and sleep, your house would suit them just fine!

They don't ask anybody. They don't pay rent. They just move in. You hardly ever see them come or go. You just know they're there when you hear them scampering through the wall or along the floor...or gnawing a hole in the wall or the cupboard door...or when you see their teeth marks on food you left out in the kitchen.

Wherever there are houses in the world, there are likely to be house mice. They sleep in the daytime, curled up in their warm cozy nests behind the walls or under the floor.

It's quite safe in the house for a house mouse...unless you set a trap for it or have a ⁽⁹⁾ house cat—a house mouse's worst enemy!

読んでいると、何とのびやかに明るく、子供たちに語りかけるように、自由闊達に書かれているのだろう。読んでいてちっとも飽きない。身近かな語いと、それらがテンポよく躍動するリズムを伴って並んだ文となっている。また読者の、「ねずみ」に対する① previous knowledge, ② experience に基づいて、さらに③ expectation をいやが上にもかき立てる作品であり、いわば“Top-down process”方式を十分に活用できる、初級者用の適切な読み物と言えるのではないだろうか。これらの passage の中ほどにある“scamper(ing)”（アンダーラインは筆者による）が、学生に馴染の薄い語彙であった場合、どう意味を探れるだろうか。ヒントはその前の‘hear’ (=receive (sounds) with ears: Longman) という動詞と‘through the wall’ (through;=in at one side (of the wall) and out at other: Longman) から、また‘along the floor’ (along;=from end to end of (the floor): Longman) から推しはかると、〈一方の端から他方の端まで音を立てながら忙しく動きまわる様子〉が、それとなく推察できるのではないか。また、“gnawing”/nɔ:ɪŋ/も発音とともに単独には意味がつかみにくいとしても、続く‘a hole in the wall or the cupboard door’を組み合わせ、さらに mouse の習性を考えれば‘gnaw’ (=bite steadily at: Longman) ——カリカリと音を立てながら休みなく齧っている様が理解できよう。

最後に、そして最も重要なこととして、まず初めに、ストーリー全体の流れと大意をつかむために、(たとえいくつかが不明な単語があったとしても) 文頭から終わりまでできるだけ数回読み通すことである。初め黙読、そして最後2回ぐらいを音読(声読)する。これでおよその大意がつかめる。黙読は主に内容理解のため、また音読は英語本来のニュアンスと、流れるような表現を味わうことにより、将来、自分が英文を書くときに大いに生きてくるものと期待されるからである。羽鳥氏は、この黙読・音読による英文内容理解度の実験報告の中で、黙読64、音読47の結果を提示し、黙読の方が理解には有効であることを証明しておられる。その理由と

して『多分これは英文を音読するということにエネルギーが注がれ、内容の理解にまでエネルギーがまわらないのである。……そこで、一時間の授業の中に「小さな声で自分で読ませる」という作業があってもよいと思われるが、どうであろうか』と提言⁽¹⁰⁾している。筆者が「音読」「声読」と言っている意味もそれと同じである。今さら小学生みたいにクラス全体での斉読は馴染まない。しかし、筆者は個別の音読は、授業の中で用いてしかるべきと考える。たとえばW大1年生のリーディングでは、当初からほとんど毎時間音読を順に割り当てている。その効果は、年度終わり頃になるとクラス全員が、帰国子女との区別もつかないまでに直読直解方式にすっかり馴染んでいるのである。声を出すことで本人自身、また回りの者たちも音読が向上し、英語本来の音調や文構成のニュアンスを味わう助けになる。内容理解と文全体を味わうことはワンセットとしてすすめていきたい。そしてこれが将来自分の英語表現の上で大いに役立つものと信じている。

IV 終

本稿は、IECを授業に適用し、その運用面と結果における効果性を実証することを目的とした。理論的には、IECはListening, Reading, SpeakingそしてWritingの四領域にわたる技能を、科目の内容に合わせながらも、効果的に活用し、最終的にはこれらの技能をall roundに修得して学生の実践的なコミュニケーション能力を養成することを目指すものである。とかくこれまでの日本の学校英語教育は、科目別縦割り式の授業で固まり、それぞれの科目が相互関連をもたされることなく、教えられてきた。実際には「英語」という生きた言語を学ぼうとしながら、バラバラに解剖された各部分を学んでいて、生きた実践英語を使いなさい、というようなものである。たとえ、生命のない「各部」を学んでいても、同時にそれらを融合させて内在する共通項を教え、血の通った「ことば」として組み上げられた——統合された手だてを講じてあげてこそ実践につながるのではないだろうか。英語のこの有機的な結合の部分、すなわち要の部分に注目して、英語をトータルに捉え、実用に直結する教授法が是非とも必要である。IEC運用にあたっては、学習者のage levelや英語の運用能力における習熟度、またそれぞれの学習目標に則して調整することが必要なことは言うまでもない。この四技能を、すべての時間に必ず用いなければならないというのではなく、適宜数時間に分けることもできる。本稿では、英語においてはintermediate levelになる大学生を対象としたIECの適用を考慮してきたので、Readingをinputに用いた方が、より効果的でスムーズな運用が図られるようである。さらにこの導入時のReadingを、より効果的なものにするには、学習者各自の積極性が大切なことは言うまでもないが、加えて、和訳を忘れ英文のままで類推力を働かせるよう自己訓練することが必須である。

また、学生の興味と習熟レベルに応じた、相応しい教材を選択する点にも十分の配慮が必要である。

さらに、IEC については今後も改善を加え、実践により役立つものにしていきたい。

最後に、いずれの学習目標を立てるにしても、従来の teacher-oriented ではなく、student-centered に心がけ、毎時の授業を生き生きとした楽しいものにしていきたいと願っている。

英 語 I (講読)

W 大学 政治経済学部

担当 宇都 裕

I. 科目の目標

原書による講読は、従来英文を読んで和訳する、いわゆる英文訳読法が唯一のそして当然の方法として採用されてきた。本科では、“和訳”を避け、本来あるべき直読直解方式をめざす。それによって速読力と実的な即応運用能力を磨く。

II. 授業のすすめ方

講義や討議は、原則として目的言語（英語）を用い、指定された教科書ほか毎時配布されるプリント等を各自音読によって順番に読み進めていく。学生は読みながらパラグラフあるいは文全体の大意をつかむようにする。とにかく、英語のままで本文を理解しようとするのだから、英和辞書を使っているのではその効果は損なわれる。したがって、本時では英英辞書を使用する。年間プロジェクトとして、各自が選んだ原書による小説、エッセイ等（300字以上）を読み、批評を英文レポートにまとめて学年末に提出する。前後期の定期テストは英文による自由作文とする。

III. 評価規準と評価法

前期・後期の定期テストのほかに、プロジェクトレポート、クラス口頭発表、ディスカッション、授業参加、出席等が評価の対象になる。

【得点総点】

100点

(得点区分)	80 - 100点	A	(優)
	70 - 79点	B	(良)
	60 - 69点	C	(可)
	59点以下	F	(不可)

【評価法】

前期テスト	30%
後期テスト	30%
プロジェクト	20%
口頭発表	
ディスカッション	10%
出席	
授業参加	10%
総 合	100%

(No. 1)

ENGLISH I (READING)

FINAL EXAMINATION FOR THE FALL SEMESTER 2001

(W University)

year 1 class 18 No. Name Y. H.

Among the articles we have read during the fall semester, select ONE article that impressed you most, and state your opinions or impressions, whatsoever, in approximately 230 English words.

[title : WAR ON TERROR-POLITICS & ORIGIN OF THE NATION

The society of the United States of America has changed since 11th september 2001. In the street, the nation flag is displayed and people sing "God Bless America". The administration presented with a choice for the world. It is that "which do you choose us or terror?" And the United States pushed forward to war at burst.

Generosity and openness fade out from their insistence. A freedom of speech is muzzled, Why most American think they have justice and they are hero? This time, I notice the history of the United States.

The United States have the idea that they are terror in the world without own country and they must wipe out terror. They regard the world as "the United States vs the world". Actually, the United States has had such conception since the beginning of founding of the nation. Why? Because the United States were founded for making ideal community. Therefore they obligated lighting the world with their ideal. That view for the world has continued all the time. So, the United States can hold international affairs as they wanted. I think its attitude is "subjective consciousness" for the international relations. Always, the United States are the subject of the world, outside them is the object every period. But in this terrorism they affective by other element expect own selection. It is a kind of a moment being the object. In other words, this affair make them understand a part of the world. Like this, their subjective consciousness was badly stung by terrorism. For having such history, the United States believe themselves to be right and hero, therefore they undertakes the leadership of the world. History organizes portion of the nation. I find a close relationship between politics and origin of the nation.

(No. 2)

Year 1 Class 18 No. Name Y. H.

II. Choose ONE novel out of the stories in 'Modern British American Short Shorts' that we have read during the fall semester. and state your opinions on it in about 150 English words.

Title : YOU SHOULD HAVE SEEN THE MESS.

I think that theme of this story is the escape of man. The hero show his fastidious character.

This is just symbol of the escape. He denies his environment. Such says and does is sign of the escape from himself. Of course, in actually, we can see such escapes frequently.

For example, there is counterfeit illness, for escaping nasty things without any trouble. Young children often use this way.

In contrast, grown-up's means is abandonment, Especially, it is mostly women. For women, it is the most important thing being lovely. Therefore we naturally believe it. Why? Because human beings want a extremely able gene.

So, we keep charm. Human beings keep on holding this instinct. The signal sent to others is appearance. But appearance is difference. People get various facility so that they show themselves attractive or, compensate it. But there are a kind of people who never try such things. "I'm never charming." "I can't work efficiently." They try nothing for such reasons. They never take every opportunity to improve own ability. By abandoning, people escape from own flaw.

Like this, there are very much kind of the escape. But all escapes are not evil. Man tend to do the act. So people identify oneself with it, and many stories modeled on it. We associate that it is not better.

With this, we draw the moral from the story.

After reading, I found the effort of stories again. We can round out own education and realize the point of life by stories. I think I will read very many stories all my life.

書くための英語の基礎となるリーディングを、英英辞典を使いながら、慣れない中でよくがんばりました。教科書のほかに、*TIME*, *NEWSWEEK* などさまざまなプリントから学ぶことができました。年間の授業を終えるにあたって、あなたの英語に対する見方、考え方に何か変化があったのでしょうか。ご意見、感想をお聞かせください。

この授業を受ける前まで、私自身日本語の論文には自信があったのですが、英語の文章・論文に関してはとっつきにくいというか苦手意識のようなものがありました。

しかし、この授業では短編の小説をいくつも読んでいく上、英英辞書を使い自分の語彙力を効率的に伸ばす事ができるため、英語による作文の方法を自然に身に付ける事が出来たと思います。もちろん、今は論文として完璧とは程遠いものですが、これから少しずつこの授業で学んだ方法で、英語の力をつけていきたいと思っています。又、授業で扱った *Newsweek* 紙等の記事から英文の講読への興味も自然とわいてきました。自分でも驚くほど意識に変化が生まれたのではないかと感じています。私にとってとても有意義な授業でした。1年間ありがとうございました。

LL I

文京学院大学 外国語学部

担当 宇都 裕

I. 科目の目標

本科では、リスニング力をつけることがその主な目的となっているが、これからの自己表現に結びつく語学運用能力を高めていくためには、聞くことから始めて、話し、読み、書くことが同等に必要となる。したがってここでは英語音素の概観復習から、会話、プリント等による多くの読み物、さらに発信型を目指して簡単な自由作文表現が出来るように訓練する。

II. 授業のすすめ方

講義、練習、討議は原則として目的語（英語）を用い、指定された教科書ほか毎時配布されるプリント等を使用して、時間の許す限り読むようにする。そして、読むにあたっては“和訳”を避け、本来あるべき直読直解方式（英語を英語のままに読む）を目指す。その場合、英和辞書はその趣旨を損なうばかりかかえって害になるので本時では英英辞書を使用する。学期プロジェクトとして、各自15の英語語彙を選び、それらを3種類の英英辞書から、発音、意味、例文を書き取り、最後にコンピューター（あるいはワープロ）で打ち出し、綴じて各学期末に提出する。

III. 評価基準と評価法

教科書単元に即した小テストのほかに、前・後期の英語による短い自由英作文、学期プロジェクト、クラス口頭発表、ディスカッション、授業参加、出席等が評価の対象になる。毎時の出席が求められる。

【得点総点】

100点

(得点区分)	80 - 100点	A	(優)
	60 - 79点	B	(良)
	50 - 59点	C	(可)
	49点以下	F	(不可)

【評価法】

小テスト	40%
学期テスト	20%
プロジェクト	20%
口頭発表	
ディスカッション	10%
授業参加	
出席	10%
総合	100%

FINAL EXAMINATION FOR THE SPRING SEMESTER 2002

(Bunkyo Gakuin University)

Year 1 Class F No. 17 Name M. K.

Among the articles we have read during the fall semester, select ONE article that impressed you most, and state your opinions or impressions, whatsoever, in approximately 180 English words

[Title : *The Cuddliest Hero in Asia (about Doraemon)*]

I love Doraemon very much. Because he is very cute and his smile is very happy for me. When I watched TV of Doraemon, I think I want to go to Doraemon's world. In Doraemon's world, I can use the mysterious magic, and I can fly with Takekopta. I want Takekopta and Dokodemo door. If I can get Dokodemo door, I will go to England, with my friends. By using Dokodemo door, I can go to every place for free. Doraemon is blue color, so his sister is Doramichan who is yellow color and has a big red ribbon at the top of her head, she is very cute.

I love Doramichan than Doraemon. I want to make friends with Doraemon but he is not in reality. When I knew that, I was so sad. Doraemon's world is very wonderful world. Do you think so, too? The characters (for example, Nobita, Shizukachan, Suneo, Gian and so on) are very funny. I love them, too. Their personalities are rich. I think Doraemon is representative machine in Japan. His smile will scatter many happiness around the world and will sow happiness's seeds in each people's hearts. Finally, I like dorayaki. Doraemon likes dorayaki, too. In the world, there are many cartoons. For example, Snoopy, Disney, Miffy, and so on. And I am proud of Doraemon as Japanese star. I think he is symbol of peace in Japan.

He always smile and laugh. I like his smile very much. I want him to be in my heart forever and become my freind.

リスニングに加えて、英英辞典を使つての *TIME*, *NEWSWEEK* その他の教材のリーディング、慣れない中でよく頑張りましたね。あなたのこの授業についての意見、感想などお聞かせください。

すごくおもしろかったです。結構、辞書とかよんでも、発音記号がわからなくて四苦八苦していましたが、今はちゃんと分かるようになりました。辞書を見るのが楽しいです。発音の勉強が好きになりました。英英辞書をひくことも楽しいです。後期の授業では前期よりさらにがんばりたいです。

宇都先生のキャラが最高でした。またたくさんおもしろいお話をきかせてください。

(注)

- (1) 文部省 高等学校学習指導要領 外国語編・英語編 平成11年12月
- (2) 江淵一公 文化人類学と英語教育「英語教育と関連科学」1976 p.196
- (3) UNESCO International Bureau of Education “*Recommendation No. 59 to the Ministries of Education concerning the Teaching of Modern Foreign Languages in Secondary Schools*” 1965
- (4) 宇都裕, 柳瀬実佳共著「平成10年度全国国・公・私立大学入試問題（英語）研究社刊」分析結果から 2000
- (5) 文部省 ibid
- (6) 宇都裕 文京女子大学研究論集 Vol.4 1994
- (7) 上田明子 読む英語「現代の英語教育5」研究出版社 1997
- (8) 羽鳥博愛 心理言語学と英語教育 大修館書店 1985
- (9) *Britanica The Young Children's Encyclopedia*
- (10) 羽鳥博愛 ibid.

参考文献

- 田中春美 「現代言語学辞典」成美堂 1988
- 長井民最 「英語ニューハンドブック第4版」研究社 1988
- 文部省 中学校学習指導要領 平成10年12月
- 文部省 小学校学習指導要領 平成10年12月